非核・いしかわ

2023年9月20日　月刊第302号

〒920-0848 金沢市京町28-8　石川民医連労働組合気付
非核の政府を求める石川の会
TEL 076-251-0014　FAX 076-251-3930
http://hikakuishikawa.com/

非核五項目
① 全人類共通の課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
② 国是とされる非核三原則（つくらず、もたず、もちこませず）を厳守する
③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
④ 国家補償による被爆者援護法を制定する
⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

核兵器禁止条約の署名は92か国、批准は68か国（9月15日現在）

1面　満蒙開拓・戦争の悲惨さ・伝えなければ　志田弘子
2面　「平和のバトンを受け継ぐ」　照田律子
4面　紙芝居『たみちゃんのノーモア ヒロシマ』の感想より
5面　ゲンが世界を駆け巡るように　ゲン連載100周年に向けた私の夢　石田優子　渡部久仁子
6面　継承するということ　「ふるさと」　末友雅子　白﨑正子
6面　軍隊のいるところへ　戦争はやってくる　塩谷道子
7面　<独標>3人の孫達へ　高久晴美
8面　戦争遺跡と平和の記念碑　絵手紙コーナー　佐藤公男　中山清子

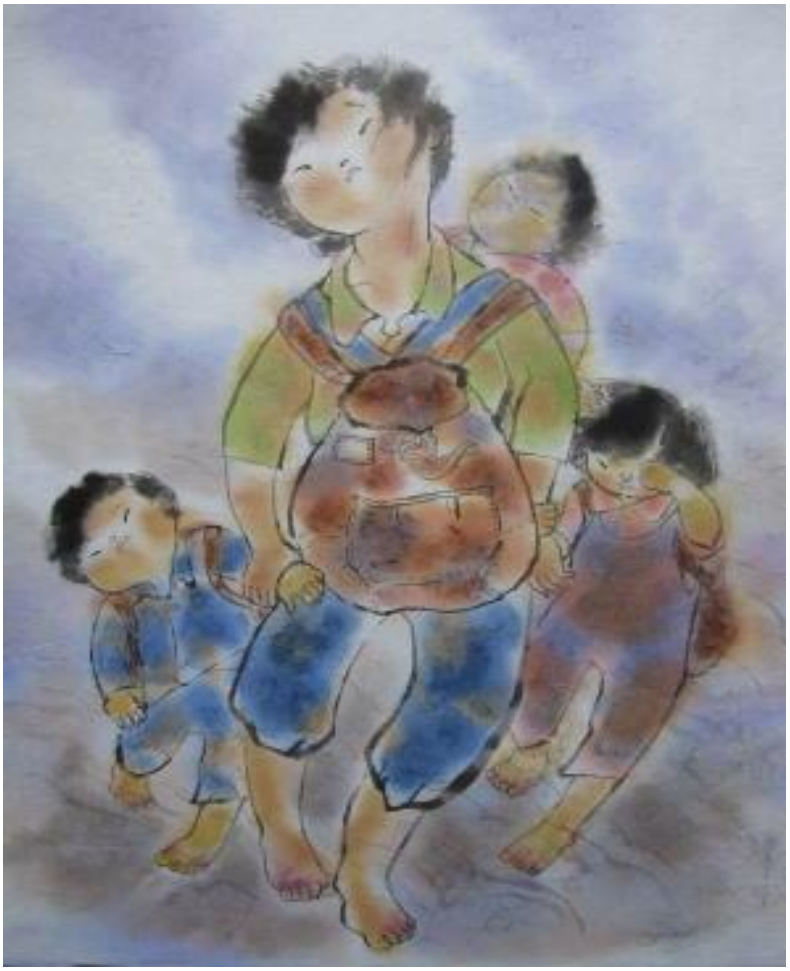
リレーエッセイ

満蒙開拓・戦争の悲惨さ・伝えなければ・・・

志田弘子

満蒙開拓のことは　藤原ていさんの『流れる星は生きている』を昔読んだ時に、寒い夜、懐に三人の子の凍える足を入れて温めたという部分が記憶に残っていました。が、小説として、ひどい状況だったと覚えながらも詳しいことはほとんど知らないままでした。

そんな私が、「絵」として描くことは、経験もしないものが軽く手を付けてはいけない・と言う気持ちがありました。が、国策による棄民ということを、熱く語られる方との出逢いに、満蒙開拓のことをもっと知らなければという思いに駆られ、図書館や本屋さんまたはネットで、関係の本を手当たり次第に読みふける日々が続きました。知れば知るほど、もっと知りたい、知らなければ・・と思う気持ちは募るばかりでした。



彩色墨絵　彷徨う（さまよう）　**志田弘子**

花鳥風月

「戦争と医学医療研究会」による公開講演会を聞く機会を得た。テーマは「七三一部隊からフクシマまで～御用学者と犠牲の系譜～」、講師は西里扶甬子氏（フリージャーナリスト）▼七三一部隊とは旧関東軍防疫給水部の暗号名で、違法な細菌戦の実験・実践を行っていた。部隊に所属した医師・研究者らは生体解剖などが戦時医学犯罪として責任を問われるはずだったが、謀略とも言える手法で米軍に研究成果を売り渡し、戦犯追及を逃れた。やがて大学医学部・研究機関に復帰した彼らは、戦後の公衆衛生、感染予防、薬事分野で「その力」を発揮したことまでは知っていた▼講師によると、米軍ＡＢＣＣから放射線影響研究所までの流れの中で、被爆による人体への影響を軽く見せかけ、政府の被爆者支援を限定させた源流に七三一部隊の影があったとのこと。悪魔に魂を売った御用学者たちの系譜は今も続き、後継研究者によって「フクシマ」に象徴される様々な問題に強い影響力を及ぼしているという▼安倍政権は「戦後政治の総決算」を叫んで日本の民主主義の危機を増幅したが、今に繋がる米軍支配の影と、それらを曖昧にしたままでいる政治こそ総決算すべきではないか。故莇昭三氏の生涯にわたる告発を思い起こす。（Ｉ記）

日本軍に置き去りにされ、国境の捨て駒とされた開拓民、何一つ持たないままに、ひたすら歩き続けた逃避行、零下二〇度にもなる凍える大地、飢えに苛まれ、倒れ行く人たち、集団自決・・。いのちがあまりにも無残に失われた記録はすさまじく、けれど読まずにはいられないものでした。

そうしていつしか、経験のない者にさえも、これだけ胸迫るこの悲惨さを忘れてはいけない、戦争の無慈悲さを、伝える方達が減ってゆく中、ほんのかけらでも伝えなければ、という思いに突き動かされるようになりました。

描いても描いても、なお、及ばず、数々の真実に追いつけない情けなさに苛まれながら、何枚も何枚も描き続けた数か月でした。

守ってくれるはずの国が、一人一人のいのちを踏みにじる国策というものに、身のうちから沸々と怒りが湧いてきます。そうして今また、再び戦場へと向かう様相の沖縄が覆いかぶさります。孫や子を奪われる愚かさをくりかえしてはいけない・・。あまりにも何もかもが雪崩打つような中、それでも諦めずに、それぞれが出来ることで声を出し続けなければ・・。そうして、小さな絵にもその声のかけらが宿りますように、と願わずにはいられないのです。

二〇二三　夏の交流研究集会　座談会

「平和のバトンを受け継ぐ！」

「平和の子ら」委員会　照田律子

いしかわ県民教育文化センターが八月二七日、教育プラザ富樫で開いた「二〇二三　夏の交流研究集会」の座談会にて**紙芝居『たみちゃんのノーモア ヒロシマ』**の絵を担当した照田（しょうだ）律子さんの発言要旨を掲載します。

・・・・・・・・・・・・

紙芝居・表紙（全16場面）

依頼当初は「なんで私？」と内心思いましたが、「平和の子ら」委員会に参加して直接、西本多美子さんにお会いして聞いたお話とか、会の人たちの思いを聞いているうちにだんだん絵が描けるようになってきました。小学生が何を感じ取るか、引き付ける場面、物の見方、視線をどこにもっていくかなど小学生目線で考えました。

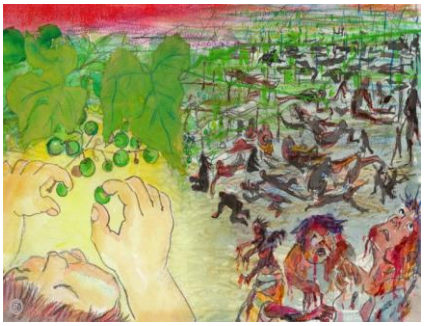
◆第二場面＝最初に描いたのは、B29の場面です。おかあさんだけが空を見ていたのですが、たみちゃんが主人公なので描き入れました。今の子にはB29は航空ショーのかっこいい戦闘機かも知れませんが、その時は不快な感じの物体。どんな形や色にすればいいのか、正面がいいのか、どんな角度がいいのか、戦闘機ではなく重たい感じの爆撃機を目に焼き付けるためにはどうしたらいいのか、B29の空襲警報が出てくるときの爆撃機を描き続けました。結果、全体が見える形にしました。

紙芝居　第2場面

◆第四場面＝子ども達の視点、捉え方としてデフォルメとか強調したい部分ですが、お姉さんが小学校から帰ってくると首の後ろから血が出ているというシーンで、お姉さんは右利きなので傷口を右手で押さえていて、左手もそうしようと思ったのですが、したたり落ちる背中の血が見えるように左手を描き、子ども達の目がいくようにしました。

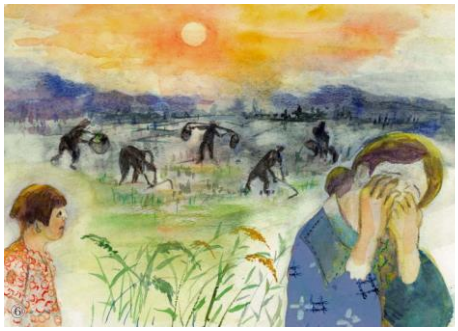
紙芝居　第4場面

◆**第五場面**＝ぶどう畑のたみちゃんを強調して、向こうの方にケガ人、真っ赤な炎を表しました。



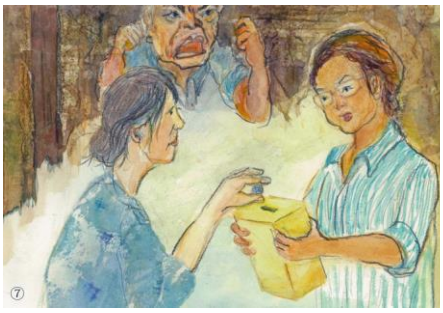
紙芝居 第５場面

◆**第六場面**＝多美子さんの原点は、お母さんがみんなにご飯を食べさせられないと毎晩泣いている姿を見て、本当に戦争はダメだと思ったということです。夕暮れ時にお母さんが泣いている姿を多美子さんが見ているシーンにしました。



紙芝居 第６場面

◆**第七場面**＝多美子さんがスラム街で募金してもらったあとで家人が怒鳴るという場面ですが、後ろにそのおじさんを持ってきて中心に視線がいくようにしました。ガミガミと言われている様子に目線がいくようにしました。



紙芝居 第７場面

◆**第九場面**＝岩佐幹三さんが自身の体験を語る場面では、お母さんが下敷きになっている回想の絵に焦点がいくように描きました。

紙芝居 第９場面

◆**第一二場面**＝少年が、お父さんを焼いているシーンがあるのですが、焼いていることに集中できるように、お父さんに謝って焼いているのです。実際は短い棒で内臓に火が通るようにしていたらしいのですが、強調して長い太い棒でガツンガツン「堪忍して、堪忍して」と言いながら焼いているという絵にしました。

紙芝居　第 12 場面

◆**第一三場面**＝「九条は世界の宝」ですが、当時のお話では浴衣を着ていた人がいたというのでこれはおもしろいと思って入れました。ハーグの国際会議の写真がないので無難なところでデモ行進の様子にしました。そのフレーズはやはり「九条は世界の宝」にしましたが、「九」の所にセンソウホウキの文字を小さく書いたのと、「宝」の点の所は広がっていくようにという思いで丸にしました。

紙芝居 第 13 場面の絵について
解説する照田律子さん

◆**第一四場面**＝イギリスの小学校で一人の少年が質問する場面ですが、場所がイギリスだとわかるように、少年のTシャツにイギリスの国旗をあしらいました。多美子さんと少年は黄色、まわりは紫っぽい色にしました。黄色と紫は補色関係なのでここに焦点をあてたくて一番目立つようにしました。

紙芝居 第 14 場面

◆**第一五場面**＝核兵器禁止条約が国連で採択された日は七月七日なので、子ども達に印象づけるために七夕を配置しました。西本さんのシャツは、元々は紫色だったのですが、橙色の方がバランスが良いと思い、変えました。

紙芝居 第15場面

紙芝居 第16場面（最終ページ）

◆**第一六場面**＝最後のページは、「平和の子ら」像の周りで、戦争に巻き込まれないように、みんなで手を取り合って平和のことを考えていこうという、ちょっと明るめな構図にしました。最初は平和の子の像で始まり、最後も平和の子の像で終わるという構成にしました。

・・・・・・・・・・・・・

今までは荷物を負わされていたという感じでしたが、これをきっかけに自分の事としてとらえ、この一年間、すべて自分の事として私が受け継いで、これを伝えていくためにとスイッチが切り替わりました。

一枚の絵にメッセージ性と人を引き付けるためには、どんな色の工夫、場面構成をしたらよいか努力してきたことが、ほんとにいい仕事をさせてもらえたな、いい財産になったなと思っています。父が私に「九条を守れ」と遺言して逝ったのですが、「あっ、こういうことか」と思いました。父親が私の仕事として教えて、背中を押してくれたとつくづく思います。

たかが一場面ですが、されど一場面、いろんな思いがあって一つのテーマを長く時間と労力をかけてきたことは、私にとって何事にも代えがたい素敵なプレゼントをいただいた、と思っています。これからみなさんが次の継承者として一人一人広めていただければ、仕事をした甲斐があったと思っています。

（まとめ　出口 隆）

◎座談会の詳報は『いしかわ県民教育文化センター通信』九月号に掲載予定です。

◎紙芝居『たみちゃんのノーモアヒロシマ』の感想より

紙芝居を購入された方から「平和の子ら」委員会に寄せられた感想を紹介します。

◇集団討議を経た文・絵だけに説得力があり、無駄がありません。元美術教師の面目躍如です。重ね塗りに潜む、幾つもの光景が一枚一枚の絵の中に窺えます。観光列車が線路上で停車するように、台詞を停止し、じっと見入っても良いほどです。絵の下手な私はただただ脱帽するばかりです。

◇「もっと訴えたいことがある」のをぐっとこらえていらっしゃると推察します。子どもたちも観る紙芝居だから、この分量でいいのです。日本の紙芝居は多くの場合、一二画面で一話完結ですから、これ以上多くなると、飽きられて逆効果になるリスクがあります。

◇脚注が七八年間の風化を食い止めています。文部科学省の教科調査官が必死になって骨抜きを図っている社会科の教科書では削除される項目のオンパレードで痛快です。よく調べ、よく吟味されました。その労苦に敬意を表します。

◇西本さんが反戦平和を訴えて回る中、心ならずも非協力的対応をしたり、権力のお先走りで妨害行為をした人も多くいたでしょうが、なぜか登場しません。西本さんの寛大な「許す心」が編集会議で理解されたのでしょうか。そうだとすれば、まだまだ私は修行が足りません。何度も上演しながら、西本さんの心に迫りたいものです。

◇この紙芝居が、従来の「平和と原爆展」などに加わって、県下で上演されることを期待します。私もどこかで援護上演します。

紙芝居の問合せ先

定価　2,000円（送料別）

「平和の子ら」委員会
事務局長　川崎正美
電話・ＦＡＸ
０７６－２５５－５２３２
メールアドレス
dgs-kawa@asagaotv.ne.jp

トークイベント
映画「はだしのゲンが見たヒロシマ」の監督＆製作者と話そう
ゲンが世界を駆け巡るように

監督　石田優子

オンラインで映画製作の思いを語る石田優子さん

私は映画会社のスタッフとして、被爆者の証言を記録する仕事を通して二〇〇九年に中沢さんに出会い、取材を重ねる中で映画化の話があり、この映画が初めての監督作品となった。

中沢さんは「人類にとって最高の宝は平和です」という言葉を残されているが、これからの五〇年も世界中にいるゲンの仲間たちと共に〝麦の精神〟で平和に向かって歩いていく努力を続けていかなくてはと思っている。「ゲン」が世界中を駆け巡っているように中沢さんの思いが生き続けるようこの映画を作った。

現在は被爆樹木に関する映画を作っている。原爆投下により、「広島には七〇年間、草木が生えない」と言われたが、今は復興している。

被爆した木の中には、爆心地側の木肌が荒く、成長が遅いものがある。被爆しても生き残った樹木は生命力が強い。樹木医さんも懸命にケアされている。

木は私たち人間よりとても長く、場合によっては何百年も生き、被爆二世、三世の木も育てられている。原爆の記録を後世に伝える存在として映画づくりを進めている。公開のときにはぜひ観ていただきたい。

石田優子著　二三九頁
借成社刊　定価　一九八〇円

ゲン連載一〇〇周年に向けた私の夢

製作者　渡部久仁子

中沢さんの思いを伝える渡部久仁子さん

私は小学五年生のとき、被爆者の証言を聞く機会があり、学校図書室にある戦争に関する本を懸命に読んだ。そのとき『はだしのゲン』に出会った。「ゲン」にはストレートに怒り、喜び、面白さを感じ、のめり込んで読んだ。小学五年生のとき、「ゲン」を読んだことが、その後の人生で被爆証言を聞くときのイメージソースになった。早い段階で「ゲン」に出会えてよかった。

中沢さんは、学校の先生や親御さんに被爆証言する機会があると大変喜ばれ、子どもを育てる大人に伝えることの大切さを話されていた。中沢さんの表現者としての才能は、漫画を描くことだけでなく、語ることもすごく上手だった。

広島市の学校教材「ひろしま平和ノート」にゲンが採用される二〇一三年の前年、ある小学校で試験的に「ゲン」を採用した学校教材で授業をおこなったとき、中沢さんも招かれて、浪曲も披露し、子どもたちに大受けだった。このとき中沢さんは学校教材に「ゲン」が採用されたことを本当に喜ばれていた。

中沢さんは、漫画『黒い雨に打たれて』と『はだしのゲン』に言いたいことがすべて書かれていると話されていた。私はこの二つの作品を通して、中沢さんの思いを伝える活動を続けていきたい。

映画「はだしのゲンが見たヒロシマ」は、この二つの作品を手に取って読んでもらうキッカケになればと考えている。そのため、中沢さんの八月六日の被爆当日の足取りを歩く＝フィールドワークを続けている。一〇〇周年に向けて、これから生まれてくる若い読者と一緒に歩くことが私の夢である。

（まとめ　神田順一）

◎ＮＰＯ法人はだしのゲンをひろめる会が、漫画「はだしのゲン」連載開始五〇周年記念事業として、八月一三日、石川四高記念文化交流館で開催したトークイベントでの発言要旨です。石田優子監督はオンラインで参加しました。

非核石川の会リレーエッセー

継承するということ

末友雅子

『反戦平和の詩画人　四國五郎』を読んだ。『おこりじぞう』の挿絵を描いた人としては知っていたが、他は何も知らなかった。満州へ従軍、苛烈なシベリア抑留を経て戻った故郷では最愛の弟が被爆死していた。そこから心に決めた生き方、画壇に身を置かず、反戦平和のために絵と詩で人々に呼びかける。若くして亡くなった峠三吉は盟友。平和への熱い思いを語り合い、描き、書き、走り回った。

一番驚いたのは、四國さんはNHKの「市民の手で原爆の絵を」運動に尽力された方だったのだということ。あの地獄のような被爆直後の写真は三枚しかない。一九七〇年代半ばNHKに持ち込まれた一枚の市民の絵から始まった人々の記憶の中にある場面を記録として残す取り組み。

「うまい下手は全く関係ありません。伝えたいという思いがあればその心は必ず伝わります。どんな紙、画材でも構いません。絵で描けるところは絵で、時、ところ、臭いや音など絵で描けないところは言葉で書いてください。」（本文より）

NHKテレビで三回番組を組んで四國さんが丁寧に説明し呼びかけた。集まった絵は二〇〇〇点を超え、テレビや書籍にもなったが、そこに四國さんの名はない。継承は表に出ない人に支えられていたのだ。

以前広島原爆資料館の地下で、一般の展示とは別に期間限定で展示されているのを見て、よくぞ残してくださいましたと絵の向こうの作者に頭を下げた印象深い展示だった（リニューアルした資料館では一部が一般の展示の中に、組み込まれただけなのが勿体ない）。

「戦争を起す人間に対して、本気で怒れ」（本文より）

幼いころ父から手渡され言葉の中の価値観をしっかり受け取り、静かに燃えたぎるように生きた父の評伝を書き上げたご子息の光氏もまた、尊敬すべき継承者であると思った。

「ふるさと」

白﨑正子

友禅染絵「ふるさと」　志田弘子

胸を打つ一枚のハガキが届きました。友禅作家・志田弘子さんが描いた「ふるさと」です。福島第一原発事故で多くの人々が失ったのはふるさとです。被災した人たちには〝兎追いしかの山　小鮒つりしかの川〟この歌を胸が一杯になって声にならず歌えないと・・・その悲しみや怒りの心境を表現した一枚です。

八月二四日、首相は〝廃炉と復興を進めるために放出は先送りできない〟と汚染水を福島県漁連の反対を押し切って流した。県民との約束を公然と投げ捨て「風評被害対策などたとえ何十年の長期にわたっても責任を持つ」と誰が本気で信用する！県漁連も鼻から信じていない。首相はさも細心の注意を払っているかのようなポーズを取り汚染水を流した。

このままでいい訳がない！復興の努力の一二年間を台無しにしていいわけがない！国民の安全など知ったことでないやり方。海洋放出以外の手立ても努力せず、賠償金をちらつかせて問答無用の強引な対応に怒りを感じている。

この怒りへの対処法はどうしたらいいのか。私は理不尽な対応を取る政治への怒りを福島の人たちと共感して行動したいと強く思っている。

（原発を考える石川女性の会）

軍隊のいるところへ戦争はやってくる

塩谷道子

沖縄県名護市のアメリカ軍基地に、新たな基地を作っている。ところがいまだにその九〇％は作られていない。調査をしたときに海底部が軟弱地帯だと分かっていたのに無理に決行したのだ。しかも沖縄県知事は工事を認めないと言っている。違法な工事なのだ。

辺野古で行われている工事がうまく

いかないのに、また沖縄で今度は宮古島や石垣島などにミサイル部隊配備が強行されている。ウクライナとロシアの戦争に日本と中国の戦争を重ねてしまったのだ。日本も軍備をしないとやられてしまうと。しかし、この思い込みは単純すぎないか。ミサイルが飛んできたので打ち返す、あるいは、ミサイルが地上に落ちるまでに打ち返す。打ち返すことをしたときには相手国はまたもやミサイルを発射する。島は完全に破壊される。そればかりか日本そのものが危ない。日本には原発もある。

なぜこうも沖縄ばかりが標的になるのか。沖縄への偏見があるのではないか。かつての戦争で、国体護持と本土決戦を遅らせるために、なるべく長時間沖縄に米軍を止めておくようにという命令が下されていた。その体質は少しも変わっていない。沖縄の島の人々はミサイル部隊が配備されることに反対している。騙されたと言っている人もいる。

「軍隊のいるところへ戦争はやってくる」とは、沖縄の人々が身をもって案じていることである。軍隊の全くいなかった島には、米軍は一人も来なかった。しかし軍隊がいた渡嘉敷島では多くの人が殺され、集団自決さえ起きていた。

そもそも政府がするべきことは戦争にならないように手を打つことではないか。ASEAN（東南アジア諸国連合）の人々の努力を見習うべきである。戦争しないために年一〇〇〇回もの話し合いを持っているのだ。

新たな戦争を呼び込まない話し合いの努力をこそすべきである。

詩人会議かなざわ「独標」より

三人の孫達へ

高久 晴美

今伝えたい
人は働く事で幸せを手に入れる
働く事は楽しい事ばかりではなく
むしろ憂うつでなければ仕事ではない
とさえ言った者もいる
働く先にのみ未来の扉がある

それにはまず健康である事
体も心も丈夫であってほしい
転んでも起きあがればいい
病に負けない事だ
さて、それには…
考えてみて
想像してみて

たいがいの事はなんとかなるさ
何があっても　何がなくても
他人のせいにせず、かといって己を責めず
生きてほしい、生きぬいてほしい
柳に風折れ無し、先人は言う
常に柔軟であれ

日々報道される事件では
「無職」が常に気にかかる
変化し壊れ始めている世の中
先を見られるほど私は生きてはいない
だろう

だから今、伝えておきたい
働く事が生きる事、そして、
自分を人を愛しなさい

編集室より

◎政府は「安全」を大規模宣伝し、原発汚染水の海洋放出を始めた。赤旗日曜版九月一〇日号に掲載された代替案が目に留まった。一つは〝モルタル固化〟。これは米国で実績があり、環境への影響が最少だとか。もう一つは〝大型タンク保管〟。石油備蓄などに使われてきた実績があり信頼性が高いとか。そもそも原子炉建屋に流入する地下水を止めねばどうにもならない。根本的対策としての〝広域遮水壁〟の検討を無視して「海洋放出ありき」を押しつけることは容認できない。（中）

非核・平和の掲示板

月	日	曜	時	行事予定	会場
9	23	土・休日	11:00	石川解放運動戦士追悼集会及び追悼者を偲ぶ会	金沢市鈴見町緑地・石川解放戦士之碑
	30	土	14:00	石川憲法会議・講演会／纐纈 厚さん	金沢市青草町・近江町いちば館 4階集会室
10	1	日	14:00	核禁条約署名連絡会「声をあげる高校生たち」上映＆斉藤とも子さんトークイベント	金沢市下本多町・金沢歌劇座別館 3階大練習室
	8	日	14:00	金沢紫金草合唱団コンサート	金沢市三社町・石川県女性センター・ホール
	14	土	10:00	むぎわらぼうし例会／のまりんの紙芝居上演「たみちゃんのノーモア ヒロシマ」	金沢市三社町・石川県女性センター第1研修室
	14	土	14:00	医療・福祉問題研究会例会／児童養護施設からみた子どもの貧困・虐待の背景と支援／堀場純矢さん	金沢市西町・金沢大学サテライトプラザ
	15	日	10:00	石川県保険医協会／原発・いのち・みらいシリーズ講演会／明日香壽川さん	金沢市鞍月2丁目・石川県地場産業振興センター
11	3	金・休日	14:00	平和憲法公布77周年記念石川県民集会／小西洋之さん	金沢市香林坊・石川県教育会館ホール

＊会報「非核・いしかわ」サポート会員を募集中です。年会費2，000円

戦争遺跡と平和の記念碑 ⑨

戦争被害（2）

佐藤公男

昭和歌謡「岸壁の母」

「慈母の愛を讃える碑」

「岸壁の母」のモデル旧富来町出身の端野いせ（一八九九～一九八一）は幼年期に北海道に移住。夫と娘を亡くした後一人息子の新二と上京、その息子が旧満州でソ連軍との交戦で消息を絶ち、母の端野は舞鶴港（京都府）で生還を待ち続けた。碑は一九五四年菊池章子が歌った原曲の「岸壁の母」だが、一九七一年二葉百合子がカバーして大ヒットした。舞鶴港には一九四五年からの一三年間でナホトカ、コロ島、釜山・興南、大連から軍人軍属、一般邦人など六六万五千人が引揚げた。その中には、引揚げ船内などで生まれた三八人、コレラや栄養失調で死去した四二七人が含まれる。

羽咋郡志賀町富来領家町・増穂浦海岸に「慈母の愛を讃える碑」がある。

戦争絶滅悲願之碑

裏面の「平和」

「碑文」に、「森岡家三代与三市は日露戦役に　四代憲一は支那事変竝に大東亜戦争に従軍し　九死に一生を得て帰還せり　祖国日本が悲惨にも二度と戦争に巻き込まれないために　その絶滅を悲願とし　終戦三〇周年を記念し此の碑を建て　子々孫々に遺すものなり」とある。右側面「戦闘」（昭和一三年）、左側面「終戦」（昭和二〇年）、裏面「平和」（昭和四〇年）の碑文が漢詩で刻まれている。

一九七五年八月、四代森岡憲一建立。（加賀市動橋町・個人蔵）

「道官咲子碑」

道官咲子は一九〇二年加賀市南郷町に生れ、一九四一年三九歳で満州（中国東北部）に渡る。敗戦前後の満州東安も避難する日本人で大混乱。ソ連兵から女性たちを守るため慰安所兼飲食店を経営し、危険を顧みずに日本人の救済に奔走した。「お町さん」と慕われたが八路軍にスパイ容疑で逮捕され、非業の死を遂げた。

碑は一九五六年養女先のあわら市に近い加賀市吉崎町国道沿に当時の関係者によって建立された。

（「平和工房　江沼の郷」主宰）

絵手紙コーナー

金沢医療生活協同組合
絵手紙班　中山清子

2023.8.15 発刊　A4判164頁　定価2000円

百年前の日本が戦争に突き進むなか、大衆娯楽誌は何を伝えたのか

戦時グラフ誌『歴史寫眞』

が伝えたこと　伝えなかったこと

平和工房・江沼の郷が所属する戦前の大衆娯楽誌『歴史寫眞』を通して、戦争の記憶と記録を次の世代にどう伝え、何を学ぶのか

著者＝佐藤公男（平和工房・江沼の郷）　大川陽一（大川デザイン事務所）

＜問合せ＞佐藤公男　電話・FAX 0761-74-6771　携帯 090-9766-0287